ISSN 0288-1748　2019（平成31）年1月20日発行

大学時報

UNIVERSITY CURRENT REVIEW

No.384
2019
1
隔月刊

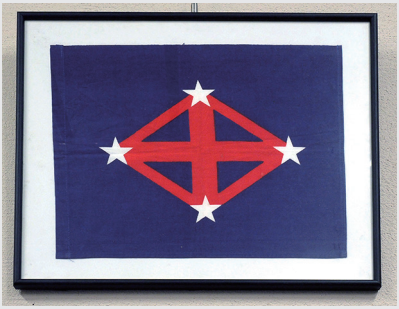
看護学部２年生の実習風景（聖路加国際大学）

特集　入学前教育の現状と課題

座談会　教職協働の現状と課題
小特集　大学Webサイトリニューアルの取り組み
明日への試み　東海大学　わが大学史の一場面　西南学院大学
加盟校の幸福度ランキングアップ
　ノートルダム清心女子大学／立正大学
クローズアップ・インタビュー
　カバディ 日本代表選手　新田 晃千さん

日本私立大学連盟

約100年前の「ペンギンの剥製」



雪嶺の「探検船旗」

南極観測隊が持ち帰った石（戦後）

創立時から、看護界を牽引する人材を多数育成

創立者ルドルフ・B・トイスラーは1920年、キリスト教の精神に基づき、教養ある看護職を育成することにより、日本の看護の質向上を目指し、聖路加国際病院附属高等看護婦学校を設立。指導経験豊かな米国人アリス・C・セントジョン女史を招き、臨床看護教育および予防と保健を重視した公衆衛生看護教育を開始しました。

本学はトイスラー博士の建学の精神を受け継ぎ、看護保健・公衆衛生の領域において、その教育・学術・実践活動を通じて、国内外のすべての人の健康と福祉に貢献することを目的としています。

聖路加国際大学

カリキュラムだけでなく、
1年を通したさまざまなイベントからも、
建学の精神に基づいた学びを実感することができます。

1 year of College of Nursing

7月

は、学生広報委
します。本学へ
保護者の皆さん
授業や学内・病
を運営します。

実習は、これまで学んできた知識と技術を
の実習です。小児、家族発達、ターミナル、
ら関心のあるテーマを選んで2週間取り組
プに分かれて実
として、主体的
揮しながら働き
ます。

【 ヨンセイ大学交換留学 】

8月

4年国際看護総合実習

本学は海外留学や国際交流の機会が貴重な経験になると考えており、すべての学生が在学中に少なくとも1度は海外研修に参加することを勧め、支援しています。国際看護学の総合実習は、実際にマニラまたはカトマンズ（実施年度により実習地が異なります）を訪れて、地域の健康問題をアセスメントし、看護活動を実践します。

【 マギル大学語学研修 】

9月

3年看護学実習

3年次の後期に行う実習は、成人、老年、小児、精神、地域・在宅などの分野にわたり、健康レベルと病者の特性に応じた実習を、それぞれ2週間ずつ経験します。実習の1日の流れの例としては、朝8時には病棟に移動し朝の申し送りを受け、行動計画のチェックと報告、病室の環境整備やバイタル測定、投薬・ベッドメイキング、介助を行い、午前の申し送りをして大学に戻り昼食を取ります。午後も引き続き実習を行い15時半頃に終了。その後は実習記録を作成します。
3年次の後期はほぼ実習の毎日です。

【 野外活動実習 】

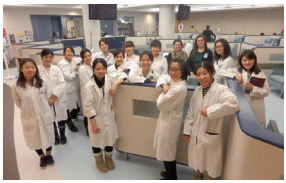
1月

【 新年感謝礼拝 】

【 看護教育創立記念日 】

2月

【 サービスラーニング研修 】
（フィリピン）



【 マギル大学医療英語研修 】

3月

卒業式

なつかしい
4年を振り返り
感謝をこめて…

【 謝恩会 】

看護学部の1年

4月

はじめまして！
今日から
かけがえのない
仲間になろう

入学式

オリゼミ@清泉寮

看護学部の新入生は入学後すぐに山梨県清里の清泉寮にて1泊2日の新入生オリエンテーションセミナーに参加します。グループワークやフィールドワーク、先輩や教職員との交流会などを通し、これからの学生生活をイメージしながら2日間一緒に過ごします。

5月

【形態機能学授業】

体育デー

体育デーは「他学年の学生や教職員と親睦を深め、身体を動かし、気持ちの良い汗を流し、楽しむこと」を目的とした大学行事です。球技や綱引き、チーム対抗リレーなど7種目で勝敗を競い合います。有志によるダンスパフォーマンスも披露されます。

6月

後輩あつまれ！
見て、知って、
聞いて、触れて

オープンキャンパス

年に約3回開催するオープンキャンパスで
員が在学生スタッフのリーダーとして活躍
の進学を熱心に検討している受験生やその
に「聖路加らしさ」をお伝えすべく、模擬
院ツアー、学生・教職員との相談コーナー等

4年総合実習

4年次の前期に行う総合
総合するための総まとめ
精神、地域、国際などか
みます。少人数のグル
施され、グループの一員
に自らの役割と機能を発
かける能力を養っていき

10月

通年

チャペルアワー

チャペルアワー委員が中心となって、毎週水曜日のお昼休みに聖ルカ礼拝堂でチャペルアワーを開催します（自由参加）。礼拝では聖書を読むことや賛美歌を歌うことを通じて、聖書に書いてあることの意味や意義を学びます。聖書にちなんだ劇や、ゲストを招いたお話会等の企画もあります。

11月

白楊祭

白楊祭は、学生の学生による学生のための学園祭です。学生たちがアイディアを出し合い、メインテーマを決め、模擬店やグッズ販売、看護体験コーナー、バザーなどを開催。ゲストを招いての講演会もあります。

12月

クリスマスの集い

本学の学生に最も人気のある行事の一つが「クリスマスの集い」です。この集いは学生自治会とチャペルアワー委員が中心となって運営しています。2部構成となっており、1部がチャペルでの礼拝、2部が祝会となっており、最後は参加者全員でハレルヤを大合唱するというのが定番です。

聖路加
ならではの
おごそかな
クリスマス

【クリスマスイブ礼拝】

【ツリー飾りつけ】

聖ルカ礼拝堂

大村進・美枝子記念　聖路加臨床学術センター

聖路加国際大学
St. Luke's International University

看護学部看護学科
大学院看護学研究科

修士課程 看護学専攻 ウィメンズヘルス・助産学専攻

博士後期課程 PhD コース DNP コース

公衆衛生大学院

専門職学位課程

博士後期課程 (※2019年度開講予定)

〒104-0044　東京都中央区明石町10-1
TEL: 03-3543-6391

大学時報

No.384　2019.1

看護教育100年に向けて

福井　次矢●聖路加国際大学学長

本学の看護教育は、1920年創立の聖路加国際病院附属高等看護婦学校から始まった。1964年に聖路加看護大学看護学部として私立初の4年制看護教育を開始。1980年に大学院博士前期課程、1988年に看護学研究科では日本で初めて博士後期課程を設置するなど、先進的かつ最高レベルの高等看護教育を追求している。さらに2014年、聖路加国際病院と組織を一体化したことによって、臨床実習・アクティブラーニング型学習の充実や国際化の推進なども図ってきた。また、2017年には公衆衛生大学院を開設。今後の看護教育・研究との連携も模索される。

2020年に本学は、看護教育100周年を迎える。国内外の臨床・教育・研究のさまざまな場面で活躍し、リーダーシップを発揮する看護師を輩出すべく、変化と発展を続けていくものである。

2019
年頭所感

リーディングオーガニゼーションとしての役割

鎌田 薫●私大連会長・早稲田大学前総長

新年あけましておめでとうございます。日本私立大学連盟会員法人ならびに加盟大学のますますのご発展と、関係各位のご健勝ご多幸を心から祈念申し上げます。

日本私立大学連盟は、昨年、『未来を先導する私立大学の将来像』をとりまとめ、私立大学の将来の方向性と重要性を示すべく、会員法人はもとより国や産業界などに積極的な働きかけを行ってまいりました。

ご存知のように、ここ数年、政府や政財界などが大学のあり方に強い関心を示し、大学改革を求める声が高まっています。その背景には、わが国の急速な少子化とグローバル化対応の遅れによる国際競争力の衰退、第4次産業革命やSociety 5.0への対応、格差の拡大などの社会環境の大きな変化に大学教育は対応していないという厳しい見方があるからだと思います。

このような社会の変化の中で、大学は教育目標・教育手法などを大きく変えていかざるを得ません。これまでは既存の産業構造を前提に知識集積型の教育を続けてきたものが、今ある仕事の半分は今後10年から20年の間に自動化されるといわれる時代、先の見えない不透明な時代においては、未知の問題を自分の頭で考え解決策を見いだす力を育てることを大学教育の目標にしなければならないからです。

一方で、次々に提示される国の高等教育政策は、明確なビジョンがないまま多方面からの批判的な圧力に応えようとして断片的な政策、高等教育政策全体の整合性を欠いた政策が積み重ねられているように思われます。このような教育行政の状況が、結果的に、私立大学に教育の画一化を押しつける可能性もあるという強い危機意識から、私大連では昨年9月に『高等教育政策に対する私大連の見解』を表明しました。

私立大学の活動の礎は、私立大学の自律性に基づく多様な教育研究のダイナミズムにあります。社会を取り巻く環境が大きく変化し、大学のあり方の見直しを求められている今こそ、私立大学は、自らが積極的に改革を行い、新しい時代における高等教育機関の姿を世の中に見せていかなくてはなりません。その姿勢こそが、私立大学の「自律性」と「多様性」を担保する拠り所であると考えます。

公財政支出における国私間の格差、その格差をさらに拡大化させる高等教育の無償化施策、教育成果の可視化、グローバル化対応や地方創生、ガバナンス改革、大学の連携統合、就職採用活動問題など、私立大学を取り巻く課題は山積しています。そして、そのいずれもが、短期的な経済効果を重視した議論により高等教育が果たす機能の本質から離れたものとならないよう、日本私立大学連盟は、私立大学のリーディングオーガニゼーションとして、情報感度と情報発信力を高め、私立大学の存在意義を示してまいります。

会員法人・加盟大学の皆さまと危機意識を共有し、一体となって私立大学の新しい潮流を作り出す行動を積極的に展開していく所存ですので、私大連に対するより一層のご協力・ご支援をお願い申し上げて、新年のご挨拶とさせていただきます。

それでもなお人格教育を目指して

――人材教育の趨勢の中で――

田畑 邦治●白百合女子大学学長

1　人間の権威の自覚

周知の通り、２０１８年は明治維新１５０年の記念の年であった。この維新の出来事を境に、日本社会は未曾有の転換を成し遂げたのであるから、幕末から維新にかけてのあれこれについては、ことあるごとに人々の関心が向けられてきたのも当然であった。とりわけ、この激動の時代に活躍した諸藩の志士たちは映画やテレビなどで繰り返し取り上げられてきた。２０１８年のＮＨＫ大河ドラマ「西郷どん」もその一つであった。私も毎週のように観ていたひとりである。

ところで、この明治維新のことを考えるたびに想起されることがある。大佛次郎の主著『天皇の世紀』の中で扱われている「浦上四番崩れ」についての記述である。朝日新聞社版文庫では、一五巻「新政の府」から一六巻「武士の城」の両巻にまたがる「旅」という章がそれである。[1]

幕末期に、信仰を公表した隠れキリシタンが、それまで２５０年にわたってキリスト教を禁じてきた江戸幕府から改めて厳しい迫害・弾圧を受け、さらに禁教政策を引き継いだ明治政府によってさらなる弾圧を被り、諸藩に配流された。流刑先では虐待・拷問など、「緩慢な殉教」とよばれるほどの辛酸をなめることとなった。３０００人を超える配流者、６６０余名の犠牲者が出たといわれる。

大佛次郎は、一般の日本史などではさほど触れられていないこの出来事について実に詳細緻密に記述しているが、その最後の段落は以下の通りである。

浦上切支丹の「旅の話」は、この辺で打切る。

私がこの事件に、長く拘（こだわ）り過ぎるかに見えたのは、進歩的な維新史家も意外にこの問題を取上げないし、然し、実に三世紀の武家支配で、日本人が一般に歪められて卑屈な性格になっていた中に浦上の農民がひとり「人間」の権威を自覚し、迫害に対しても決して妥協も譲歩も示さない、日本人としてはまったく珍しく抵抗を貫いた点であった。当時、武士にも町人にも、これまで強く自己を守って生き抜いた人間を発見するのは困難である。権利と言う理念はまだ人々にない。しかし、彼らの考え方は明らかにその前身に当るものであった。（第一六巻、一二二頁）

長い引用となったが、この文章は読むたびに胸に迫るものがある。日本の歴史を学び、その中で教育の問題を考えようとするとき、ここにいわれていることは150年前のことに終わらない、現代にまで及ぶ強烈な何かを示唆しているかのようである。私には、「日本人が一般に歪められて卑屈な性格になっていた中に浦上の農民がひとり「人間」の権威を自覚し」とあるところが、とりわけ注目に値すると思われる。

人間の権威、人間の権利、換言すれば、人間・人格・個人の尊厳といったことは、いったいどのような人間の営みを通して獲得されてくるものなのか。抽象的なスローガンとしてではなく、歴史の事実として、いったい誰がそれを勝ち取ってきたのか。歴史の表面には必ずしも現われてこない、無名の人々の営々たる努力、戦い、忍従を通して、昔も今も、最も大切な価値が実現されているのではないか。

明治に入ってから、この弾圧は広く諸外国の知るところとなり、時ちょうど欧米を視察していた遣欧使節団一行は、これが国際条約締結の障害になっていることを認めざるを得なくなり、その結果、1873（明治6）年2月24日、江戸時代初期から実に260年に及んだキリスト教禁教令が廃止されたのであった。

2 「すべての人に対してすべてとなる」

さて、この禁教令が解かれてからわずか5年後の1878（明治11）年、フランスからシャルトル聖パウロ修道女会の3人の修道女が函館に派遣された。現在、日本各地で教育・福祉に広く活動する「白百

合学園」（大学、高校、中学校、小学校、幼稚園、養護施設など）の発端である。

この修道女会がアジアに派遣されるようになった経緯を調べたことがあった。パリ外国宣教会のフォルカード司教は、日本の開国を待って香港に滞在していた時、「非常に多くの捨て子たちの惨状を目の当たりにし、フランスに戻り、姉が入会していたシャルトル聖パウロ修道女会に、孤児たちの世話をするスール（修道女）たちを香港に派遣してくれるよう要請した」[2]という。函館に到着した修道女たちも、孤児院・施療院・子女のための学校など、社会福祉・教育の分野に生涯を捧げて活躍した。

「孤児」という、まさに「人間の権威」が危機に瀕している状態を見過ごしてはならない、という単純にして否みようのない声に従おうとしたのであった。

ところで、白百合女子大学の創立の基盤であるこの修道女会のモットーは、「すべての人に対してすべてとなる」という聖パウロの言葉である（新約聖書『コリントの信徒への手紙Ⅰ』9章22節）。相手の救済、救いのためには、自分の立場に執着せずに全面的に相手の立場に立つということである。人間は誰もが一個の尊厳を有する主体であり自由であるが、それを自分だけが享受するのではなく、困窮にある他者のためには、時にはその自由を二の次にして仕えるものとなる、と言い換えてもよいだろう。

白百合女子大学では、この修道会のモットーを宗教教育・人間教育のビジョンとして、折りあるごとに伝えてきた。これがどれだけ実際に学生・卒業生に浸透しているかは明示的には測りがたいが、正しい道であると信じている。

確かに、しばしばいわれているように、自己実現や自己の能力の開発は不可欠なことであり、教育・学習の場においても重要なものであることはいうまでもないが、それは注意しなければ、自己中心となり、苦境にある他者への無関心につながり、ひいては社会の格差や不均衡への加担者にさえなりかねないものである。

この「自己実現」と「他者への関心」は、私たち人間存在の基本中の基本テーマといってよいものだ。この二要素がバランスよく成長することが教育の目的でもあるが、実際には至難の課題であることを私たちは常に経験させられている。

２０１８年８月下旬、東南アジアおよび東アジアカトリック大学連盟（ASEACCU: The Association of Southeast and East Asian Catholic Colleges and Universities）の学生・教職員による国際集会が広島で開催され、本学からも５人の教職員と５人の学生が選抜されて参加した。テーマは、「カトリック大学と平和教育」であった。参加者の報告会で学生たちが口をそろえて語ったのは、この集会に参加して、自分の英語力を確認することができたことと、これまで自分が平和の問題で知らなかったことに気付かされ、多くのアジアの学生と友達になれたことであった。

ささやかな報告会であったが、意味するところは大きく、私には印象的であった。先に述べた「自己実現」と「他者への関心」という二つの要素が密接に関連していること、われわれが心を開けば、この二つのバランスは意外に近いところから得られるものであることを学生たちが教えてくれたのであった。

３　人材と人格

先に、自己実現と他者への関心が二つながらにして教育の目的だと述べたのは、「教育基本法」を連想してのことであった。この基本法については、２００６（平成18）年の改正時を中心に大きな議論がなされたが、「個人の尊厳を重んじ」ること、「公共の精神を尊び、豊かな人間性と創造性を備えた人間の育成を期する」こと（以上「前文」）についてはさほどの対立はなかったかと思う。これを受けて、第一条「教育の目的」が「人格の完成を目指」すことと宣言されているのである。

「人格の完成」とはあまりに現実離れした理想に見え、また具体的イメージのない抽象論にも感じられて、教育現場ではあたかも神棚に掲揚された護符のような印象をもって扱われ、それについて真剣に議論する人は少ないのではないだろうか。しかし、人格を広く人間の望ましいあり方（人間性）と受け取ることが許されるならば、実際に教育の現場で教師が行っている営みにおいては、自己実現（個人の尊厳）と公共心（他者・社会への関心）の両面が無意識の内にも人格の内容として認められているといってよいのではないだろうか。

それにしても、「人格」は意識的な課題としては冷

遇されがちであり、教師の努力も空しく、教育全体、学校全体は結局のところ他人よりも「できる子」と「できない子」を生産するシステムとして機能しているのではないだろうか。[3]

近代産業社会の宿命ともいうべき生産至上主義に奉仕する有能な「人材」の育成は、「人格」が本来意味していたはずの、真の自己実現と他者と世界に開かれた視野の広い人間性を養うことができているのだろうか。

最近では、教育をめぐる言説はこぞって「人材」「人づくり」の合唱である。これにはもっともと思われることも多く、情報技術の目覚しい発展という現代世界の趨勢は、これまでの教育とはまったく異なった教育方法、学習方法を要望している。教育現場では、これに加えて、「教育成果の可視化」が喧伝されており、その勢いはほとんど強迫的なものとなっている。

こうした状況下では、「人格」はもはや死語となってしまったと思われてくる。

しかし、それでもなお、人間は時代のニーズに合わせて形成される「人材」だけであってはならないと思う。『学習する学校（Schools That Learn）』の著者センゲが明言しているように、子どもたちは修理の必要な「欠陥品」でも、外部からの力によって組み立てられる「機械」でも、まして勝手に扱ってよい「モノ」でもない。「子どもとは自発的に成長し、また内発的に進化する力をもつ、生きたシステムである。[4]」

西洋においても日本においても、哲学者や教育学者たちは、人間のこの「機械」でも「モノ」でもないありかたを指して、「人格」（ペルソナ）と呼び、その内実は、理性と意志によって広く真理と善に開かれたかけがえのない個人、と考えてきたのであったが、その意義は現在も有効ではないだろうか。

4　時流に抗する言説と声

先に、「現代世界の趨勢」という言葉を使ったが、時代がどういう方向に向かっているかは必ずしも明らかではない。10年先を見通すことはできても、30年先はどうなのだろう。時代は不透明で不可知なものであるから、その中で暗中模索しながらも善く生きる生き方こそが学ばれるべきだ。だとすると、教

育成果の可視化や教育の質の評価というものも、拙速は避けられねばならないだろう。[5]

もちろん、時々の流行や時代の趨勢には取り入れるべきプラス面が必ずあるが、そこに隠れている危険なものを賢明に見抜いて、時と場合によっては断固として拒否すべき場合もあろう。そのために、私たちには時流に逆らう精神の自由が必要である。「言説」のことをdiscourse（英）とかdiscours（仏）というが、本来それは「流れに抗する」という意味である。

人格教育というとき、学習の主体である児童・生徒・学生の一人ひとりの声が、逆らいの声や言葉・言説も含めて聞き届けられることが望ましいと思う。教育現場において、それがどれだけ困難なことであるとしても、である。

シャルトル聖パウロ修道女会の会員で本学の初代学長であった三島初江（１９０７―２００８）は、１９６５年の大学創設の折、時代の趨勢に対するありようと教育の目的について次のように表現した。

「女性に高い学問的知識の必要が叫ばれている今、彼女らはますます多くの事を知り、多くの事を考えなければならない運命をになっています。しかも教育の目的は、時代の流れ、あるいは吹きすさぶ世の風にもけっして動かされない信念を胸の奥底にもつ人間を育成することではないかと思います。学問の探求は人を真理に至らせ、そこにおいてはじめてまことの人格を生みだすはずであることを、私どもは身をもって体験していきたいものであります」。[6]

●注

1　大佛次郎、天皇の世紀（15）新政の府、（16）武士の城、朝日新聞社、１９７８年。

2　白百合女子大学創立50周年記念誌、白百合女子大学50周年記念誌編集委員会、２０１５年。

3　ピーター・M・センゲ他著、リヒテルズ・直子訳、学習する学校（Schools That Learn）、英治出版、２０１４年、80～81頁ほか参照。

4　同じく、71頁。

5　苅谷剛彦講演「大学教育とは何か　それはどのように評価できるのか――「社会の変化への対応」というマジック」、日本私立大学連盟、平成30年度教学担当理事者会議、平成30年8月27日。

6　白百合女子大学創立50周年記念誌、２０１５年、9頁。１９６４年12月20日発行の『白百合学園報』号外特集（白百合女子大学創設記念）から転載。